

校 友 会 報

第 8 号

昭和 40 年 12 月 20 日

日本大学第二工学部校友会事務局

福島県郡山市田村町徳定

電話 郡山 ②1563 番

発行人 小林秀一

編集人 近藤功

一週間のハワイ

広川友雄

今年九月始めに、計らずも一週間をハワイで過ごす機会を与えられた。日米物理学会合同会議に出席して研究発表を行なうこと、諸事情視察との目的であつた。

何しろ始めての海外旅行とあつて始めは緊張したが、一度日本を離れると、途中で日本人に接する機会が多くたる為か、至極自然な気持で滞在できた。これは予想に反したことであつたが、このようなことなら時折海外に出掛けて、地球上に住む人間の生活感覚が国柄によつてかなり違うことを身近かに感じとつて来る必要があるようと思えた。すなわち、われわれの生活もこれら外国人の人達と切り離して考えることは今後ますますむずかしくなるであろうから、時折彼等の生活の中に自分を投げ込んで直接彼等のもの、考え方をつかんで来る必要があると思う。

この度接した米国人を通して、白人の生活感情として次のようなものを感じとつた。

個人対個人の関係においては、お互いに相手の感情を傷つけないように練らされている。時には相手をより楽しくする態度が至極自然に出て来る。「すなわち相手を同国人か異国人かを区別する必要のない時の彼等の態度は、異国人に対しても同国人に対すると同じように愛想がよい。しかし国民として他国民に対する時には自国の優越を、あるいは利害を第一に考え、時には想像外の手段に訴えることもあるようだ。この両者は区別して考えなくてはいけないが、これらをいかにして調和させるかが重大な問題であると思う。」

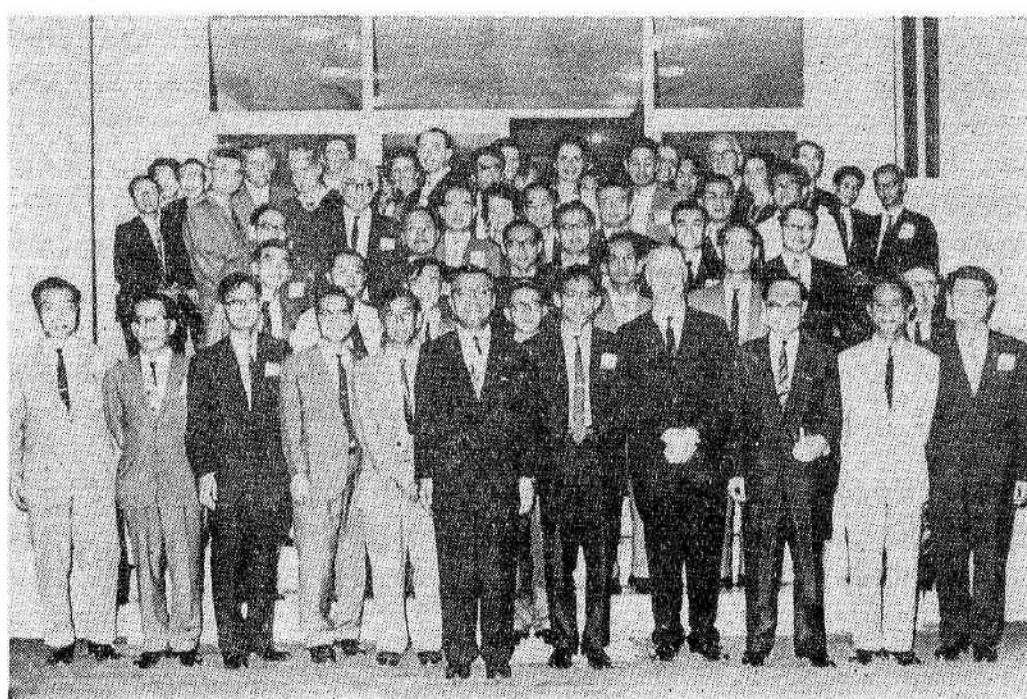
異国人同志、個人的な知り合いができるだけ多く作るのも、解決策の一つと考える。

以上が出版報告書の一端であるが、この出張の期間、庄司先生の御長男庄司太郎氏御夫婦および御長女庄司香久子さんには大変にお世話になり、短い滞在期間を最大限に利用することができました。紙上を借りてお礼を申し上げたいと思います。これらお三人は共にハワイ大学に留学し目下研究に励んでいらっしゃるものです。

その他に具体的な話は多くありますが、この度はこの位に致します。

写真は出席者歓迎会の時にハワイ総領事館玄関前で撮つたもので、前列向つて左から三人目が筆者である。

(筆者は第二工学部
学監・一般教育科
教授・理博)



九名の一般校友を迎えて

校友の学生への講演・懇談会を開く

一般校友と在学生とを結ぶ行事である、「校友の学生への講演・懇談会」は、去年に引き続き、今年度は去る11月10日(水)の午後に行なわれた。

各科毎の教室にわかつて会がもたれ、各科主任教授から出席校友の紹介とあいさつがあり、続いて出席校友の講演があつた。講演後、会議室で出席校友と学部先生方との懇親会があり、出席校友を励ますと同時に、昔なつかしい懐古談などの披露があつて、有意義だつた会合を終了した。

当日の出席校友は次の九氏である。

◇土木工学科

佐川 長己(2回卒)福島県土木部白河土木事務所
石井 一栄(4回卒)東京ボーリングKK・工事部々長

◇建築学科

大河内一三(5回卒)KK久米建築事務所・設計室主任
佐々木賢一郎(8回卒)山下寿郎設計事務所

◇機械工学科

森本 渊(6回卒)三愛石油KK・羽田営業所航務部
管理課管理係長

龜谷 省三(10回卒)丸三製紙KK

◇電気工学科

宗像大三路(4回卒)帝國電波KK・蕨工場・技術部
設計一課課長代理

◇工業化学科

市川 肇(3回卒)荏原インフィルコKK・技術部
設計第二課

諸橋 明(3回卒)東北開発KK・福島工場・工務課
試験検査係長

以下に、各講演者の講演のあらすじを記載しますが、講演のすべてを速記したわけではなく、その一部分だけであり、文責はもちろん編者にある。

佐川 長己氏

土木に関係する人は、地球の開拓者であるとの意気込みで生きていかねばならないと前置きして、県庁の機構を説明し、災害復旧には非常に苦労するが、これが技術のみがきどころだと思つてそれに当らなければならぬと思う。又、基礎調査における必要な実験は、学生中にマスターするように心掛けなければならない。

石井 一栄氏

就職の指針として、自分自身の性格から考えて、民間会社か官庁関係を決める。気性の激しい人は官庁には向かない。そのような人は、民間の方が、ピツタップされる場合が多い。将来は家庭を持つから、その点も考えに入れて、あらゆる点から就職の基準を決めなければならないだろう。

土木科での質疑応答から

- ◎工事には、技術と段取りが大切である。
- ◎人間関係をうまくやるには、学識・常識を奥に秘めていなければならない。
- ◎あらゆる人間を平等に扱う。それぞれの立場を考えてやる。
- ◎体を張ることがあるから、常に身体を丈夫にしておく。
- ◎礼儀・けじめの正しい動作は、将来にのびる要素をもつていると考えられる。
- ◎疲れた場合でも、結婚してからでも、たえず研究を行ない、自分自身をきびしく、強くしていく。又、自分自身を学ばしてもらつていると云う精神が大切であつて、日曜日毎に休むなどはもつてのほかである。

大河内一三氏

都市再開発と建築と云つた内容の話があり、設計主任としての立場から、現在当面している都市問題をとり上げ、アーバンデザインと建築設計について話をした。職場には、各大学の人間が多いが、学校別の差は殆んどなく、もしそがあるとすれば、学校差でなくて個人差であろう。

佐々木賢一郎氏

現在たゞさわつてゐる仕事について、一応の話をした後で、いざ仕事について、或る仕事を与えられると、基礎知識の少ないことが、いやと云う程に感じさせられる。だから、学生時代にあまりのんびり過したことが後悔されるから、学生時代には、何でも知つてやろうと云う心掛けが必要と思われる。

森本 渊氏

学生時代には、何の考えもなく、授業時間内で与えられるものだけを、消化していればよいと云う考え方もある

だろうが、私は、やはり、学生時代に、一つの研究目標を立てて、それを、完成させることが必要だと思う。これによつて、工学的な物の見方が確立し、それが出来ておれば、その応用は容易である。又、やつた結果は、必ずレポートで、正確に表現出来るようにすることが大切である。

現在、国際第二空港建設のために必要な「給油パイプライン」の設計で忙がしいが、設計の資料は主としてアメリカから来るので、特に英語の力は要求される。やはり、学生時代にしつかりやつておくべきだろうと思う。

亀谷 省三氏

初めに、化学工場に勤務する、機械技術者の問題点などを、例えば、修理や運転管理などについて、その苦労話などを話した。

就職の選び方は、資本金とか、給料の高低などではなくに、自分の一生をかけてやりたい「仕事内容」を、第一にすべきだと思う。

又、会社に出ると、自分の趣味などは、時間的に制限されるから、学生時代に、マージャンや碁などを、或る程度やつておくと良いと思う。会社に入つてから、お客様の接待などに、それが必要となつてくることがあつて、困ることがある。

※氏は、工程管理に関して、昭和39年に、工場長賞を受賞している。

宗像大三路氏

会社の機構などを話した後に、自動車と盛衰と共にしてきた、自動車用ラジオの進展について、特徴（音質・雑音など）を述べ、ラジオ電気回路の専門的な説明で、ラジオ製作上の諸問題を説いた。

入社後の心得として在学生にのぞみたいのは、「何んでもやれ」「積極的に進め」と云うことであり、希望と不安とに対して、自分の力を惜んではならないと思う。在学中の工場実習については、なるべくしておいた方が良いと思うし、就職する場合に、大企業と中企業のどちらを選ぶかと云うことについては、大企業でも同じことが言い得るけれども、中企業の方が「自分の力を伸ばすのにはより適している」と思われる。

市川 鰐氏

荏原イルフィルコは水処理全般に亘つて仕事をしているが、そのうちで私は「イオン交換樹脂による水の精製」と云う部門に所属していると前置きして、

1、イオン交換樹脂の実際的な簡単な説明

◎実際問題として、水道水（市水）から純水を得る場合に、 Cl^- が多い時、その前処理として、 Na_2SO_4 や活性炭素などを使わねばならない。

2、イオン交換樹脂装置の説計の説明

◎各種装置として

イ、混合床型 ロ、3 bed-2 tower型

ハ、4 bed-5 tower型

などがありその後、結びとして、

最近、独創的な研究などと云うことがしきりに云われるようになり、そのため、独創性に就いての本を通読されていると良いと思う。又、仕事のことで色々な工場や官庁に行くけれども、どこに行つても「日大」の卒業生がおり、それだけ心強くも感じ、「日大の卒業生」としての誇りを持つて仕事が出来る。と話を結んだ。

諸橋 明氏

会社の中で、今まで手がけてきた、耐熱材料について話をすると云うことで、最近、各界から、高圧高温に耐える材料についての研究・開発が盛んに取り上げられてきているが、近い将来には新材料として

イ、炭化物 ($\text{SiC} + \text{Si}_3\text{N}_4$)

ロ、窒化物 (Si_3N_4 など)

ハ、硼化物

などが開発されるであろうと予想を説明し、氏が新材料としての ZrO_2 の製造についてと研究の苦労話があり、その後、 ZrO_2 の耐熱材料としての、いろんな性質について説明があつた。

開発研究の体験談として、人間の考えは、従来からの概念（潜在的なものも含めて）にとらわれすぎて、狭い考え方をして失敗する。一つの研究に対して、その研究のワクにとらわれすぎて、そのワクの周囲は見向きもない。それではいけないのであつて、研究しようとする分野だけでなく、そのワク外のことにも気をくばつてやらなければ研究は成功しないと思われる。実験は結果を得るまでは判らないものであると云うことを、やはりキモに入れておきたい。

社会に出た時には、人間関係が大切な要素になり、それをマスターすることが、自分自身を練ることにもなると思う。又、会社の中やその他のところで、私学の卒業生は一般に大らかであり、こせこせせず、かけひなたがないと云われている。やはり私学としても、この良い点をどしどし伸ばして行くべきだと思う。どこの大学を出ても、社会に出れば皆一しょであり、結局は、自分自身でやらなければ「答」は出ないと云うことを強調したい。

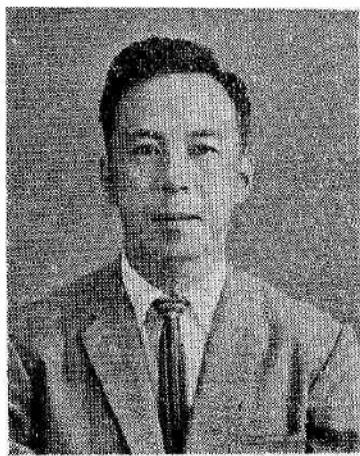
この「校友の学生への講演・懇談会」を、明年度からは、6月初旬頃に開催致したいと、事務局では計画しております。そして、毎年開催する一つの恒例会にしたいと思います。

それで、学生の新卒の求人のためや、その他に、後輩の在学生達を激励したい、と云つた希望をお持ちの方は、遠慮なく事務局に申し出て下さい。

出席校友の希望者を募集いたします。

イタリー便り

橋本甲四郎



校友会の会員の皆さんお元気ですか。外国出張のことは、早くから決められていたことなので、早くから準備をしたらよさそうなのですが、難用と横着なため、その日の午前中まで大変な騒ぎで、ようやく規定重量に荷物を作り上げて、9月18日夜10時30分

にJALで出発することが出来ました。

北極回りで、夜からすぐ朝になり、また夜になり、午前6時40分と云う時刻に、デンマークのコペンハーゲンに着いたのですから、感覚がおかしくなります。その上更に季節風が吹き、雨を混えての嵐模様に、ホテルは12時迄部屋がなく、大槻いやになりました。

しかし、コペンハーゲンから大学や工場に約束がありましたので、自動車でその場所に行き、終るとすぐホテルに帰つて寝る仕事、その上語学が余り得意でないのと北欧人の英語の聞きとりにくい事で、着いた當時はどうなることかと思つておりましたが、そのうち耳もなれ、何とか現在まで旅行を続けて来ました。

現在はイタリー北部のミラノに居ります。イタリーと云うとすぐローマと思うでしょうが、ミラノはイタリーの経済の中心地です。全イタリーの平均収入の約二倍の収入があるとされており、旅行した人がよく言うイタリーの貪しさは、南部イタリーの地方のことと、ひどい所ではミラノの約4倍の収入と云う所さえあります。イタリーは今まで小生が回つた国内では、一番ほこりつい感じです。今迄の所とガラリと変り、小型自動車がうようよ走り、城でも宮殿でも、北欧にみた美しさとは異なり、何かどつしりとした感じで、たしかに古い歴史を物語るものでしょう。その古さを見物させて、国際貿易の一部約12~15%位を補つているイタリーを想像されれば、如何に観光に力を入れ、又、人々が観光者にすれば何かが判ることと思います。

さて、小生の旅も、現在のミラノで約25ヶ所目の都市で、國では8ヶ国目です。あと同じ位の日数で、フランス・イギリス・アメリカを回り、12月初めには帰国する予定です。

今までに、大学の研究所や工場等を20ヶ所見学してきました。考えてみると、私の旅行は、終始、諸先生

方や先輩及び後輩等の皆さんのご好意と、諸外国の人々の善意によるものだと感じております。研究所や工場等小生の専門の分野では殆んど同じ様なもので、別段豪華な設備や機械は見当りませんでした。ただ建物となると、日本とは全然違つてゐるのですが、これも生活様式の違いによる古い歴史の差であることを痛切に感じます。大学の教育にしても、日本的なものと、西歐的なものの功罪はありますが、それを比較するには、余りにも基盤が違うのではないかと云う事が考えられます。ただ、西歐のこのエリート教育の中にも、教育技術と云いますか、効果のある教育法とでもいいましょうか、そのようなものを常に考えていることが判ります。この点は、日本の、まして我々私学の様に多大な教育をする上では、十分研究されて然るべきだと思います。彼らがどのような考え方をし、どのように現在を意識しているかと云う事は、小生余り外語が出来ないのでよく判りませんが、古い伝統を黙々と守り、その歴史の上に彼らは生活しており我々せつこましい日本人からみると、とにかく進歩的でないようにも思われる時があります。この事は大切な事で、例えば、一つの企業でも、日本と同一の水準で技術を持つておりながら、製品もほぼ同一価格であつて人件費は日本の三倍もかかる。日本ではどうしても倍も出せない。たかが5000円位のツップ要求で、組合と会社が角つきあわし、仕舞いにはストライキなどと騒ぐ事になる国から来てみると、どうして企業が成り立つているのだろうと驚く位です。これは資本構成に日本工業が欠点を持つておらず、はね返りが我々の給料にひびき、そして又我々の生活を十年一日の如く変わらないものにしてしまう原因となるのだと思われます。人の専門のものをおかさず、自分の物で商買を初める西歐諸国と、日本人々が同様な生活を持つ事ととうてい考えられない事だと思います。

もし、日本産業が現在の借金を返して自力資本になつたら、きっと西歐と同じように生活の水準が上昇するでしょう。この貧乏国イタリーも決して日本とは違わないような国でありながら、ミラノでは一人当たり100ドル、5人家族だと500ドルの収入を得ているそうです。

研究所等の設備等は先程ものべましたが、現在の日本と余り変りませんが、組織的に、又研究方法に相当の違いを認めます。この点については、なお、米国をみてから色々考えたいと思います。

イタリーは昨年から今年にかけ、国際収支が赤字になつたので、引きしめを行ない、そのため成長率は3%以下に落ち、特に繊維と建設が不況だそうですが、政府は来年は5%にまでもつて行くために手を考えているとかどこかの国と似ていますが、その差が余りに大きく、その歴史が余りにも物を言う事を、肌に感じながら、旅行を続けております。

皆さんのご健康とご発展を、遠くアルプスの横、ミラノからお祈りいたします。

1965年10月26日夜

(筆者は工業化学科講師)

NEWS

◎学部名改称を申請

日本大学では、かねてからの懸案であつた、二学部の学部名称変更（昭和41年度から）を、この9月に文部省に申請した。

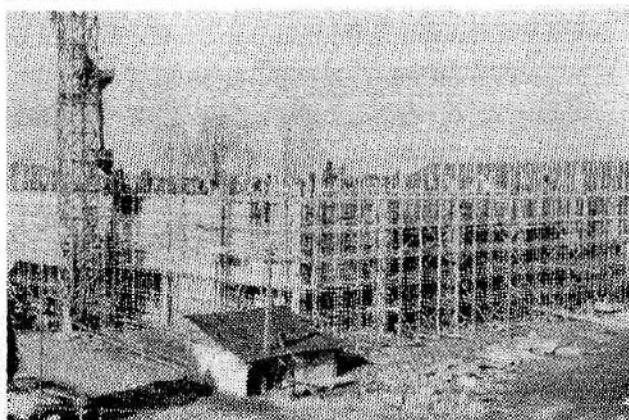
これによると、第一工学部（千葉県習志野市）は「生産工学部」に、第二工学部（郡山市）は「工学部」に名称が変更される予定であり、文部省の認可を待つている状態である。これが実現すれば、理工学部（神田駿河台）生産工学部、工学部の三学部が、日本大学の方針である产学協同にそつて、時代に即応した工業教育への道が確立することになる。（日本大学新聞第704号より）

◎学術研究報告会が開催される

昭和40年度の第9回学術研究報告会は、第二工学部主催校友会後援で、12月11日に行なわれ、各科にわたつて、総計73件の発表があり、学部に在職している先生方だけでなく、一般校友の参加もあつて、盛会だつた。

◎大講堂の建設に着工

会報7号で一部を記載しておいた「大講堂（兼大体育館）」は、去る8月に地鎮祭が行なわれ、その後、大成建設によつて工事が初められ、現在は、写真のような、進行状況である。



第二工学部校友会懇親会

（東京地区）の開催について

第二工学部校友会では、去る昭和38年3月に、東京地区的懇親会を開き、100余名の校友が出席して、盛会であつたが、今年度も、このような会を目下立案中である。一応の案は、①41年3月の24・25・26日のいずれか。②東京都内。

③1,500円か2,000円程度。で、詳細が決まり次第に、東京周辺の校友には、連絡を致しますが、それ以外の地区に在住している校友で、参加を希望する人は、事前に、事務局まで連絡をしておいて下さい。

建設場所は、木造2号校舎の跡であり、1階は、玄関ホール・食堂・購買部などで、2階が大講堂になつておらず、3階がホールなどとなつてゐる。

又、これと同時に、本館（図書館）の工事も着工されており、場所は、北心寮跡である。

◎松塚君が母校の専任講師に

40年4月1日付で、松塚勇君（電気工学科1回卒）に、母校の専任講師の辞令が出、後輩の指導にあたることになつた。

◎永瀬君が研究成果を発表

永瀬喜助君（化学1回卒）（齊藤化学研究所勤務）は、色材協会誌（VOI38、No8）に「うるしとエポキシ樹脂」と題し、うるしの硬化機構、うるし液の精製、うるしとエポキシ樹脂の塗膜物性など両者の比較について、研究論文を発表した。（技術ジャーナル310号より）

◎下宿主懇談会開く

下宿主を学校に招き懇談する会は、本年も10月16日の学部祭開催中に約150名が参加して行なわれた。

本年は、郡山女子短大須田先生の食品の栄養に関する講演があり、続いて真剣なる懇談会がもたれた。

午後は学部内及び展示会を案内、常日頃の学生活動を見てもらい、学生に対する理解を深めてもらつた。

ヲグラ工業 株式会社

代表取締役

小
お

椋
ぐら

一（機械7回卒）

営業品目（各種設計製作）

治工具・金型・専用機械・検査具・測定具・精密部品

神奈川県平塚市長持236番地

電話 平塚 0463(22)3511 代表

会員消息

— 事務局ではこの頁の投書をお待ちしております
写真・スケッチなども歓迎いたします —

吉田 宏（建12回）（日建設計工務北海道事務所）
私の仕事が建築という創作活動であることも手伝つてか
昨今の経済不況にもさして災わいされず、多忙且つエネルギー
を送つているのが現状です。在学時代の広範な部活動（建研・J C A S 第二工学部支部、管弦樂部）は、自己の限界を意識しつつも、共同体の意義を身をもつて体験することが出来、今日、設計組織の中にあつて、独自性の全体化と、若い建築家グループの結成に大変よい結果を与えてくれました。学部を卒立つてはや2年、四季の推移を心ゆくまで満喫しながらの学生生活は（今、急流の中にあつて）明日への英気を養うに貴重な存在であつたことを益々痛感致します。それだけに、このアカシヤの木立に囲まれた学部の発展が、未知のエネルギーの発祥の地であることを象徴し、昂揚し得る姿であることを強く願つてやみません。
終りに、在学時代の部活動に際して、アカシヤ育英会より多額の奨学金を授与されましたことに、紙上より深く謝意を表する次第です。降雪の札幌より。（40.12.）

（元あかしや奨学生）

金田 穀（土13回）（松村組東京支店）

今春、4年間お世話になり、青春の数々の思い出を秘めた郡山を後に、来たるべき期待と不安との入り混じつた思いを胸に、実社会へと飛び立つて早や12月、時おり正月の声も聞かれ様とする今日此頃、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか？

不況の波と共に、就職難の感すらある昨今、学部発展の為にも、この壁を打ち破らんものと、学生、教師、職員一体となつて邁進しておられる事と存じます。
又、その礎となる新入生の募集作業も、日増しに多忙を極めている事と思いますが、念願の学部名問題も、各受験雑誌募集欄の「日本大学工学部改称申請中」との活字が物語る様に、そのエネルギーを送つている時の経過を感じない訳にはいきません。

土木技術者の卵として入社、最初に与えられた仕事が、大東京のペツトタウンとして、最近とみに脚光をあびる春日部市（埼玉県）のし尿100kl/d処理、及び塵芥60t/d処理施設、新設工事の現場員でした。

工事はその性格上、消化槽（第1・第2）曝氣槽、沈澱池、ガス貯溜槽、機械室建屋、焼却炉、煙突（70m）、道路、擁壁ect……という具合に、極めてバラエティに富んでおり、1年生としては非常に得るところの多い現場で、汗と泥とコンクリートにまみれての毎日でした。しかし、入社後3ヶ月目に、土木技術者として、施工屋というものに限界を感じ、悩んだ事もありました

が、今はそれも越えて、ただ一筋にという所です。11月22日より東京支店内勤（土木課）となり、毎日、着なれない背広を着、満員電車にもまれて通勤し、各現場の図面と、久しく手を付けなかつた専門書とのニラメツコですが、近い内に中央高速道路の橋梁（八王子）か、地下鉄6号線（板橋）の現場へ行く予定で、期待しております。

私が土木屋として、社会へ第1歩を踏み入れて、先ず感じた事は、我々建設業というのは個人への技術よりも、一つのチームとしての技術が大切だと言う事です。

それには学生時代に、ある程度の専門知識はもとより、各自の個性ある人間性と協調性とを育てておく事が、最も大事な事ではなかろうかと思います。

来春の卒業見込者の中から、既に私の会社へ2名入社が内定しているとの事、有望なる後輩と会する日を楽しみにしております。（40.12.）（元あかしや奨学生）

長 悅雄（土13回）（福田組）

我学園の地、郡山を離れて、もう8ヶ月先生、先輩及び後輩の方々に、御無沙汰をお詫びします。

私は現在、新潟の福田組に勤務しています。我社にも日本大の先輩が多く、何かと相談にのつて貰い、良き兄貴が出来て嬉しく思っています。入社後約3ヶ月は新潟臨港埠頭災害復旧工事に従事しておりましたが、その後、官庁及び民間工事の設計積算を担当しています。

今迄、いろいろと指導して戴いた先輩が来春には、家業を継がれるので心細い限りですが、先輩の意に反しない様、努力する覚悟でいます。

この仕事をするようになつてから設計施工の重要性を痛感すると共に、出来上がつた構造物が、その目的を果している姿を目にする時、口に言えない喜びを感じます。何かと忙しい毎日ですが、此頃ふと、郡山に帰つてみたいと思います。私は夢多き青春を望郷の思いを抱かせる郡山に学んで幸福だつたと思っています。

最後に我母校の今後一層の繁栄を祈つて詫びとします。（40.12.）（元あかしや奨学生）

西村 博光（建13回）（鹿島建設KK）

読書の秋などと形容詞のいつぱいつく秋がおとずれ、母校も一層のご発展をされ、大変うれしくおもいます。

過日、名簿をお送り下さいましてありがとうございます。

私も鹿島建設の四国支店の方に勤務致しておりますので今後共もよろしくお願ひいたします。（40.10.）

杉山 功（土4回）（秋田市水道ガス局）

今回もまた貴重なる校友会名簿をお送りいただき、誠にありがとうございます。私も元気で勤務致しております

ます。 (40.10.)

赤松 亮悦 (機12回) (白河バルプKK)
40年版の会員名簿をありがとうございます。母校増々発展との事、大変嬉しく思っております。今後も連絡を密に願いたいと思います。 (40.10.)

青山 清道 (土13回) (日本大学大学院理工学研究科
土木工学専攻)

校友の皆様には御健闘にて御活躍のことと存じます。
現在私は大学院に籍をおき、土質力学を専攻しております。土木工学は土質、橋梁、水理、コンクリート等種々の専門分野に分れているが、土質ほど理論と実際との間に隔たりがあるのも少ないと云うのも、土そのものが複雑な性質を有していることも起因するが、土圧論を除けば近代的な、土質力学の研究が初めたのは、今世紀初め頃からであり、未解決の問題も多い、それだけに情熱をそいで取組まなければならない、学問の一分野であると思います。講義で学ぶ土質力学の裏付として、三協基礎KKの御厚意により、実際的な土質の勉強をさせていただいている。現場透水試験、ウエルポイント、薬液注入、土圧、間隙水圧計の測定の為、現場にも時々つれていつてもらい、泥まみれになり働いている人々に接する時、エンジニアとしての生がいを感じます。

この所長さんも生糸の、エンジニアで、第二工学部出身の先輩の方々も沢山働いておられ、細部にわたり、指導していただき、校友のありがたさがしみじみと感じられます。

こうして、勉学に励めるのも、在学中親身になって、語学のコーチをしてもらつた、仲田先生 (現愛媛大)、第二工学部諸先生方、先輩諸氏のあたゝかい御支援と深く感謝致しております。 (40.12) (元あかしや奨学生)

花井 騩 (化3回) (郡山市教育委員会)
発展する郡山市をと思い、四号国道を福島方面に向つて撮つてみました。在学中だつた10年も前にくらべれば、見違いる程の「郡山」です。 (40.11.) (写真共に)



連絡先・勤務先変更者

(新連絡先・勤務先のみ)

小川 享 (化12回卒)

永井 紀 (化12回卒)

青木 伸夫、阿部 武昭、福原 隆次
(機12回卒)

赤松 亮悦 (機3回卒)

菅生 貞勝 (電13回卒)

福田 俊彦 (機7回卒)

大野 謙二 (建11回卒)

宮本 雄二 (機12回卒)

佐川 隆祥 (機7回卒)

小林 忠紀 (機13回卒)

皆藤 登 (電13回卒)

小山 泰 (機12回卒)

島田 宏 (建6回卒)

山崎 敏弘 (建11回卒)

中田 正光 (電1回卒)

小国 潔 (土11回卒)

橋本 尚 (機4回卒)

磯崎 浩也 (機10回卒)

山上 清 (土7回卒)

富田 光雄 (機5回卒)

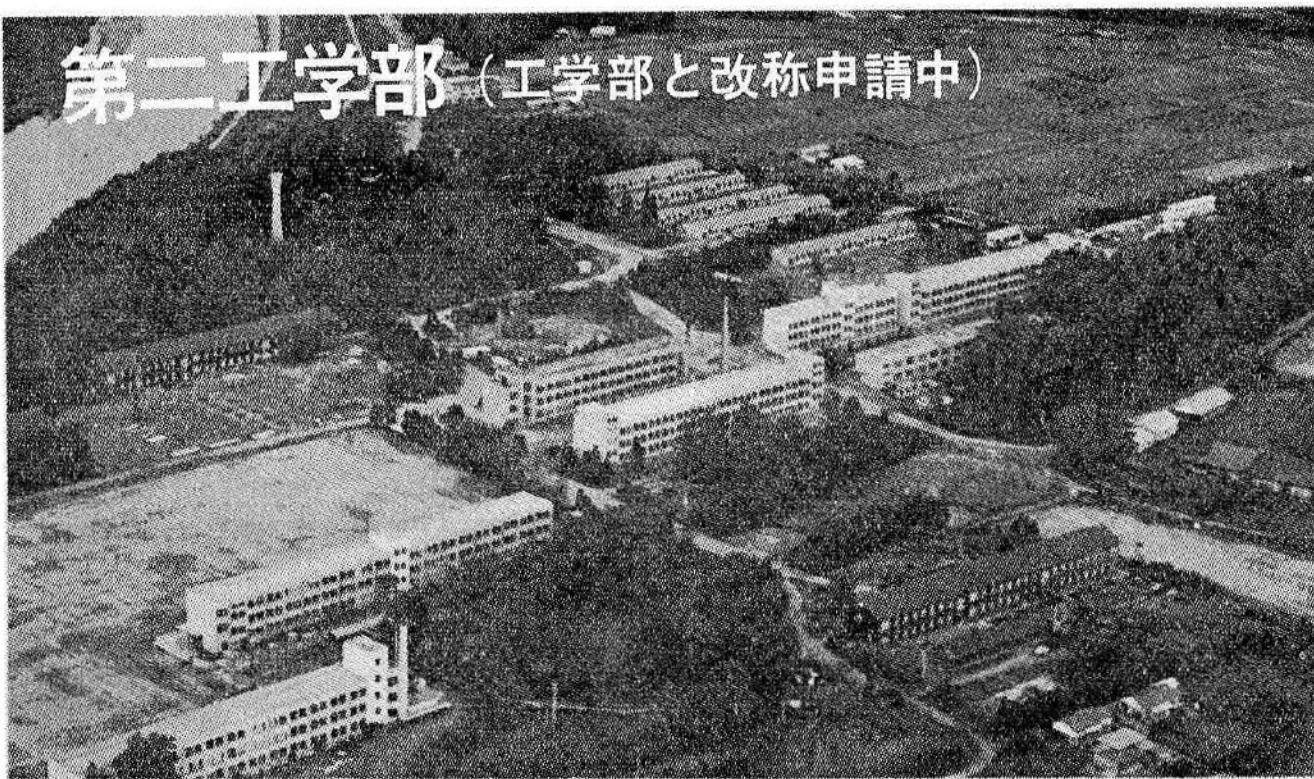
事務局だより

◎この「校友会報」にニツクネームを付ける予定でしたが、選考の結果、今まで通りに「校友会報」として続けることになりました。協力下さいました皆さんに、お礼申し上げます。

◎校友の皆さんの中で、自営又は自家勤務している人や事業所を、広く紹介する意味で「校友会報」に広告を掲載しています。希望者は事務局までお知らせ下さい。

◎「校友会報」のための原稿を、常に募集しています。技術紹介、近況報告などお送り下さい。投稿原稿によって、より良い「校友会報」にしたいと思います。

第二工学部（工学部と改称申請中）



工学部教育の理想と特色

— 親心あるきびしい研究指導 —

本学部はいわゆる「家族大学」を理想とするものである。家族大学は教師学生ともに一体となり、生活も研究も娯楽もすべて一緒であり、真理への情熱と友愛とにむすばれた家族接觸によつて立つことがその本姿である。眞の実力も人格もこのような学園によつてこそ形成されるであろう。かつてのオックスフォードやケンブリッジのような大学はまさにこの姿を持つていた。けれども、このような理想は喧嘩な大都市にだけ偏在する日本の他の諸大学では容易に達成されないうらみがある。

これに対して本学部は新産業都市郡山から程よい距離にあり、しかも広大静寂の一区画に別天地をなし、自然に師弟一体の実をあげ易い特殊境にある。この絶好無比の環境を本学部は天与のものと認識し、これを充分に活用する教育方針を進めて來ている。自然の恩恵によつて養われた豊かな人間性と、教授の家族的指導によつてたくわえられた学問的素養とは、技術界に進出しようとする本学部学生にとって、自らのむべき無二の力となつている。

昭和41年度 日本大学第二工学部入学試験要項

(昭和41年度より工)
（学部と改称申請中）

募集学科	試験科目	試験期日	出願場所	試験場
土木工学科	数学 数学Ⅰ 数学Ⅱ B	東京出張試験 2月24日(木) 25日(金)	東京都千代田区 神田駿河台 日本大学理工学部内 第二工学部入試係	日本大学理工学部 講堂
建築工学科	理科 物理B 化学Bのうち 科目選択	郡山試験 3月9日(水) 10日(木)	福島県郡山市田村町 日本大学第二工学部 入試係	日本大学 第二工学部講堂
機械工学科	外国語 英語B			
電気工学科				
工業化学科				
募集人員 各科150名				

□ 2月24日 筆記試験および面接(3000番まで) 25日面接(3001番以下)

□ 3月9日 筆記試験および面接(6000番まで) 10日面接(6001番以下)

□ 試験科目 数学Ⅱ Bについては昭和40年度以前の卒業生についても不利でないよう取扱う。

□ 入学案内書・募集要項は下記へ請求してください。

日本大学第二工学部入試係
福島県郡山市田村町 電話郡山②(代表)3230